
シムズ・シムカートンの考察

9210

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シムズ・シムカートンの考察

【Nコード】

N28440

【作者名】

9210

【あらすじ】

聡明で変装が趣味なシムズ・シムカートン。通称・シムカと猫のエルム・スピリットが住む都市リンドバークの治安は過去最低となり、警察の信用が低迷している矢先、『W3（ダブルスリー）団』という怪しい保険団体があらわれ住民の信頼と財産を手に入れようとしていた。

シムカは団体の危険性に気付き弟子のエルムとともに事件の全貌を解き明かしてゆく。

意外すぎるシムカの正体にも迫る『シムズ・シムカートン』シリーズの第一作。

W3団の保障（前書き）

『縦書きで読む』PDF『機能を使いますと、いくらか読みやすくなると思います。』

W3団の保障

シムズ・シムカートンは自宅の階段を早々と降り、外へ出るなり一度振り向いて自室の窓を睨みつけ、ため息まじりにこんなことをいった。

「なあ、君。私は酷く思うことがある。私たち、つまり探偵師や哲学者に数学者。それに通ずる探求者にとって、万物のあらゆる真実は道端に転がっているものであり、部屋の中で書物を読み漁っても決して真実は見つからないであろう。

たとえ見つかったとしても、それは真実ではなく事実という抽象的なものだ。複数性を感じ独創性に欠けている。美しくないよ。だから真の探求者は自ずと旅に出るものだ。君もそう思うだろう？
エルム・スピリット君」

僕の顔面に向かって上から叩きつけるように指をさすシムカに毎度の事ながらよくも次から次へと纏まった言い分が生まれるものだなと感心してしまい、同時に彼の真剣に惚けている目を見て、思わず吹き出しそうになった。

「たしかにその通りですね。こうして外に追い出されたことによつて、家賃を滞納した結果、大家のルイザン又婦人に愛想を尽かされ、道端で路頭に迷ったあげく、浮浪者の旅を決意したという、シムズ・シムカートンの確固たる意思の真実を発見することができました。確かに転がっていましたね、そこら中に。当然そこらの大衆も気づいているでしょう」

「さすがエルム君。非常に丁寧かつ、解りやすい説明ありがとう。感謝する始末だ」

そうシムカはいうが、彼の表情は明らかに分が悪そうで眉間に皺を寄せている。そして道端の鳩も飛んでいってしまうような大きな怒鳴り声で昼飯にしようといい、この場から一刻も早く立ち去りたいと云わんばかりに早足でルイジアナ広場へと向かった。

ルイジアナ広場に着くと、広場の一角にある寂れたカフェで昼食をとることになった。とにかく安上がりにしたことはないとしムカがいうので私はその店を紹介したのだ。私にとっては大変馴染みのある店であった。店の名前は『ブルータス』という。

シムカは席につくなりニコニコしながら店内をぐるりと眺め、なんと高級感のあるトタン屋根だというと昼食はまだかと身を揺らし、非常に落ち着きの無い素振りであったが、お目当ての昼食くるなりその揺れもピタリと止まった。

ゴミ入れのバケツをひっくり返してその上にトタンをのせたようなテーブルに彼は両肘をつけ、さも不服そうに握りこぶし大の色の悪い黒パンを弄くりまわしながらいった。

「ときにエルム君。たしか君はネコ科の亜人族だったであろう。このパンと水だけの質素な昼食にもう一品加えることなんて実に容易いことであろうて。まあ、このパンをみたまえ。おそろしい硬度を秘めている。まるで岩石のようだ、このように壁に叩きつけても跳ね返ってくるという始末。こんな凶器を堂々と公に晒し、さらには客人に食わせようとは。役所の目は誤魔化せてもこのシムズ・シムカートンの目は誤魔化せんぞ！ ええい、エルム君、止めるなよ。私の怒りはこのカビだらけのチーズの横に今朝水揚げしたばかりに魚さえあれば収まるのだ。それで店主の命は救われるというのなら安いものだろう。生きの良いものを頼む。私はここでのんびりと水でティータイムをしているから、ああそれとこのバッチを付けてゆきたまえ。きつと役に立つ」

そついで終えるなりシムカはテーブルにドンと両足をのせ、自前のティーカップをポケットからとりだしそれに水を移し替えて何とも有意義な表情を浮かべては目を瞑るなり鼻歌を歌い始めている。

僕はさもげんなりとし、その見慣れない三角印のバッチを胸ポケットにつけ渋々と店を出た。

広場の中心部にある市場に向かいながら思う。まったくあの男の人使いときたら。しかし感情とは裏腹にヨダレを垂らし、唾をぐび

りと飲む自分が酷く情けなく単純であり、ネコ科の亜人種である決定的な本能感じさせた。

W3団の保障2

さて、ルイジアナ広場の市場には幾つもの商店が並んでおり食物は然り、大概なものは全て揃うほど充実している。北部の田舎からやってきた僕にとって全てのものが多く大きく新鮮であったことはいうまでもない。

この都市リンドバークに来てから、ほどなくしてシムカと出会いそれはもう奇怪な事件に幾多も遭遇してきたが、まだまだ未知なる謎がこの市場の品数の如く膨大に眠っているであろうと思わせる人ばかりである。

シムズ・シムカートン曰く、『謎というものは人だかりのようなものであり、一度に見ようとしても一つの景色にしか見えない。感を使い人ごみを掻き分けたところで大衆の真ん中に光る真実には辿り着けまい。真実に近づくには一人一人の特徴である靴、衣服、顔、髪の色、性別、身長、国籍、名前などの情報を把握し、ぼんやりとした謎という輪郭を明確にする。真実に近づけば近づくほど謎は逆にヒントになるものさ。』

あとはその輪郭をなぞってゆけば自然と嘘みたいに、大衆の隙間から光る真実を見いだすことができるわけだ』

僕は目を凝らし大衆の隙間からみえる青白く光った青魚を発見した。ポケットには2ギルと5セント、あの魚の尻尾も買えない金額である。

さて、どうしたものか。この金額で買えるものといったら店内に吊るされている小魚の干物くらいである。ええい、仕方が無い。この際、魚であればなんでもよからう。確かに僕らネコ科の亜人族は盗みに長けている。夜分の暗闇も感じさせない眼光と、大きく張った耳は一枚葉の擦り音さえも聞き分け、薄紅の小さい鼻は獲物を決して逃さず、すらりと跳ねたヒゲはあらゆる危険を察知し、人間には到底反応できない反射神経と瞬発力をもった種族。それがネコ科

の亜人種。と、いうのは酷く宣伝じみており、実際はそんなことはなく、人並みの格好をしてしまえば卓越した能力も発揮できず、そんな暮らしに慣れてしまえば自然と能力も衰えてゆうものであり、実際この目の前の魚を奪つすることさえ、怖じ気づいている始末だ。シムカには悪いが干し魚で我慢してもらうことにしよう。よくよく考えてみると僕の種族が当たり前のように盗みを働いているような言い草である。まったくこれ不愉快極まりないものだ。

僕は一人分の干し魚を買おうと店の前に近づき、店主に注文をした時だ。

いつの間にか僕の横にぴたりとついて、黒い眼帯をつけた汚らしい老人が目の中の大きな青魚を両手で掴み、あつというまに人ごみの中へと消えていった。

ことの速やかさに唖然とした店主がやつと泥棒お！ と、大きく叫ぶがなにせこの人ごみにこの賑わいだ。悲しくも店主の声は思うように届かないときた。しかし不幸中の幸いであろう、店から見える距離に警察官が歩いているではないか。

店主は反射的にその警察官を呼ぼうと大きく口を開けたが一つ間をいれ、くやしそうに唸るともう一度あたりに目をやり、そしてなんと僕をみるなり大声で頼みかけて来た。

「あんたそれW3団のバツチだろ！ 俺の店もつい最近から、あんなところの保険に加入してるんだ。ほら証明書だつてある」

店主は僕の胸ポケットについている三角印のバツチをみて、店の壁に貼つてある『保障団体加入店』と記された紙に指をさし、盗人を捕まえたなら盗まれた青魚をただでやるといい、僕も話がよくみえないがあの大層な魚をただでもらえるとなればネコ科の本能が目覚め、ご自慢の嗅覚と瞬発力で人ごみのなかへ一気に突っ込んでいった。

さすがはネコ科の亜人種といつてもいい。生き物は食が関わると凄まじい能力を発揮するものであり、僕はあつという間に先ほどの盗人を発見した。

しかし驚くことなけれ、この盗人。とてもじゃないが老人の脚力とは思えない速さであり、あんなに丸々と太った大魚をあのように軽々と持ち上げ走っているではないか。くやしいことに姿はみえるも一向に差は縮まらないときた。

僕は夢中になり、辺り構わず四本足で追いかけていた。するとどうだろう。盗人が急に立ち止まりくると振り返るところこちらに向かつて一つ会釈をし、目の前の見覚えのある店に入ってしまったのである。

これはいかに！ 驚いた事に店の名前は『ブルータス』である。さつきまで僕とシム力が昼食をとっていた馴染みの店ではないか。おそろおそろ僕は店内に入ると、僕が店を出る前とかわらずシム力がテーブルに足をのせ、ティーカップを持ちながら目を瞑り鼻歌を歌っている。そして店の中では何とも香ばしい焼き魚の匂いが立ちこめている。

「やあ、おかえり。遅かったね」
きよろきよろと店内を見回している僕を小馬鹿にするように彼は目を瞑りながらニヤリと笑みを浮かべた。

「あいにくだが私は安っぽい干し魚なんて口にする気はなくてね。それにむかし干し魚を喉に詰まらせて死にそうになったことがあるんだ。あれは辛かった」

そういつて僕に向かつて黒い布きれを投げつけた。それは薄汚れた眼帯であった。

「こんな変装をするくらいなら、はじめから貴方ひとりで十分だっただろうに。わざわざ僕に無用な使いをさせて、それがただの悪戯というならば人が悪すぎます！」

僕は騙された怒りより、彼の変装を見抜けなかった己の恥ずかしさで顔を赤くしテーブルをドンと叩いた。

「まあまあ、そんなにカツ力するはでない。ほら、おいしい焼き魚が出来上がったようだ。それに君があの場合にしなければこうも上手くはいかなかったのだから、あからさまに無用ではないのだよ」

シムカは笑顔で僕を椅子に誘導し、テーブルの上の焼き魚を僕の皿に寄そった。

とにかく汗水ながし多少コートも汚れ、腑に落ちない心境ではあるが、こும்美味そうな焼き魚をみると、単純ながら一気に思考が食に変わってしまうのが猫である性なのかもしれない。

W3団の保障3

僕たちは大きな焼き魚をべろりと平らげ、シムカは胸ポケットからタバコ一本とマツチ箱をとりだしてプカプカと頭上に大きな輪を作り、なんとも愉快そうに鼻からも煙をだしている。

「そういえば店主がいつていたW3団ってなんですかい？ えらく警察よりも信頼されているようですが」

シムカは待っていましたかと云わんばかりに尻のポケットからくしゃくしゃの新聞紙をとりだし、数枚めくりそれを四つ折りにして僕によこした。

「声に出して読みたまえ」

僕はいわれるままに、チエック印がついた新聞の広告面を読んだ。

『我ら「Wild・West・White（略称・W3）団体が貴方の大切な財産を悪から守ります。W3団の保険に加入しますと以下の3つの保障がきます。』

1、保障期間中に財産、商品などの盗難にあつた場合、無条件で財産の7割を返金させていただきます。

2、保障期間中は日夜問わず、あなたの所有する大事な財産や商品を24時間態勢で我が団員が厳重に監守いたします。

3、捕獲した犯人は厳罰に処置をするため、警察にではなく直接我が団体によつて適切な処置をし、今後二度と悪事に手をだせないよう公正させ社会に復帰させることを約束します。

以上の保障を一律年間300ベールで加入できます。あなたの大切な財産をW3団が守ります。 Wild・West・Wh

ite 団体取締役 ウエスト・ラー・ホークマン』

「なんとも善意のある保険団体ですね。財産が7割も返金されるなら年間300ベールは安いくらいだ。僕が商いをしていたならば

必ず加入するでしょう」

シム力は天井を見上げゆっくり煙を吐き出して、そのまま天井を見つめながらゲラゲラと酷く下品っぽく笑いはじめた。

「いやあ、そうだろうに。確かに魅力的な保険制度だ。しかし仮にもし君が商人でこの組合に加入しようとしたら、僕は君に忠告するね。さあ実に驚くことなかれ。エルム君、君は加入して数年でまるまる財産を失うことになる、とね」

「それはどういう意味でしょうか？ 3年分の加入金は9000ベール。全うな商売をしていたらそのくらいの額は払えるでしょうに。それにもし財産が奪われても7割が返ってくるのであれば財産がなくなるなんて考えられないでしょう。それにそういうことにならないための保険じゃないですか」

シム力はどつと笑うと申し訳なさそうに真面目な顔をみせるもすぐにまた顔をニヤけさせては、わざとらしく咳払いなんかをみせる。

「なにがそんなにおかしいのでしょうか」

「いや失敬。あまりにも善良な考えで、あまりも君らしい純粋な考察だと思つてね。いや、それにこれは大変な事件の始まりにすぎないかもしれない。しばらくこんな大きな事件はなかったから嬉しくてね。とりあえず店をどうするか。散歩ついでに見せたいものがある」

そういつて店をでると彼は広場に向かって歩き始めた。

「見せたいものつてなんでしょうか」

「まあ、あせらない。それとそのバッチは外しておくように。偽物だつてばれてしまうからね。わかっているとと思うがこれは団体の団員である証なんだ。あの店主は最近組合に加入したらしいから気づいていなかったけど団員は皆あのように白い格好をしているからね」

彼の目線の先にはなんとも異様な格好をしたものが広場の中にいた。それも一人や二人ではない、何人もいる。僕らは近づいて凝ら

してみる。彼らは皆、三角型の目の部分だけ穴が空いている白いマスクを被り、その下にはマスクと同色の白いオーブを羽織っている。そして彼らの胸には三角印のバッチがついている。

「なかなか物騒なものを持っているね」

シムカが眉を潜めながらいった。

「とくに武器などはもっていないように見えますが」

さらに目を細めてシムカはいった。

「たぶん右手に仕込みナイフのようなホルダーが付いているね。

いや、サイズからして小剣だろうか。アサシンとは思えないが・・・。それに見えないかもしれないけど腰には長剣をぶら下げているね。長さから察してエストックあたりだろうか。そして彼らはその嚴重な武装とは裏腹に、監守としては全くのど素人であるう」

「僕には全く解りかねます。まずなぜ仕込み武器があるとお分かりになったのでしょうか？」

シムカはもつと近くにいきこうといい、順を追って丁寧に話をはじめた。

「まず仕込んである武器だが、ちょっとそこの団員をみていたまえ」

シムカはそういつて広場の人ごみに入りあつという間に消えてしまった。

ほどなくして果物屋の店の前に立っている団員の元に一人の薄汚れた女性が近づき、団員の前を通り過ぎた瞬間、実にわざとらしく大きく転倒してみせた。端から見たら団員が非情にも女性を蹴倒したような光景である。そして女性は苦しそうに倒れたまま団員に起こしてくれといわんばかりに右手を団員に向けた。

するとどうであろう。団員は仕方が無く右手で彼女の手を握った瞬間、黒く小さいものが勢いよく団員の袖から現れた。女性はそれを見るなり表情を強ばらせ一目散に人ごみの中に逃げていった。一方団員の方はかなり動揺し、右手の手首を左手で覆い近くの団員のもとに駆け寄った。

「驚いた事に仕込んでいたのは小剣ではなく小銃のデリンジャーだったよ。あのタイプは手首の部分がスイッチなのだよ。しかも銃の使い方もままならないものだから、非常に焦っていたようで手が震えていたね。いやあ、暴発するのではないかと冷や汗ものだったよ。まあ、だからこそ彼らは安易に右手が使えないのさ。」

見てごらん、ほとんどの団員が不自然に右手を垂らしているだろう？ 全員が左利きの可能性はまず薄い。あれは右手に何かを仕込んでいるという事だ。腕に仕込むとしたら小剣か小銃しかない。僕は小剣とふんで右手を出す。君は右手で握手を求められたら右手で受けるだろ？それと同じ原理さ。万が一左手を使ってきたら強引に感謝の握手を求めようと思っていたよ。まあ、予想通り右手を使つたので、手を握ったときに手首を捻ってスイッチを起動したのだよ。ちなみに駆け寄った場所にいる団員がどうやら団体の主任のようだね」

いつの間にか僕の横に立っているシム力は唇の紅をハンカチで落としながらつぶけた。

「それに彼らの足下を見てごらん」

「なにやら地面に細い線のような跡がついていますね。ふむ、彼らが移動するたびに跡がついてゆく。なんででしょう？」

「あれは腰についている長剣がずり落ちて剣の切っ先が地面に擦れて出来る跡だよ。彼の身長は18センチほどであり、そんな長身の彼が引きずる程の長剣とはいかに。素人でも扱え、切っ先の細い長剣といえばエストックに限るであろう。監視能力はないのは見ても通る、皆一点の方向しかみておらず、たびたび時計をみて何かを待っているようだ。集中しすぎている。あれじゃ近くで盗難があっても気づくはずがあるまい。しかしそんな彼らは幾度も輝かしい功績をだしている。見たまえ、その壁に貼っていた広告だよ」

広告には一人の団員が三人の盗人を縄で縛り、太った貴族と握手をしている写真が写しだされていた。

『W3団、フランソワ卿の宝石を盗んだ無法者三人をたつた一人で捕まえる。屈強なる団員があなたのもとに一人いれば安心解決。』

Wild・West・White団体取締役 ウエスト・ラー・ホークマン』

「一人で三人も捕まえるなんて凄いですね。想像できないな」

「さよう。物理的に一人が三人を捕まえるのは不可能だ。かといって仲間の団員に加勢してもらったとは書いていない。屈強なる？馬鹿馬鹿しい。自前の剣を鞘にも入れず引きずってそれに気づきもしない素人になにができよう。これは全くの捏造だね」

シム力はそういつて、広告に顔を埋め思い切り鼻をかんで地面に叩き付けた。

「記事だけではない。この団体があからさまな安っぽい作り話なのだよ。こんな低級な芝居にも気づかないから警察の信用が皆無と なってしまったのだ。これは警察の信用回復のためにも彼らに少し手 伝ってもらおう。たしかエルム君、君の知り合いにイヌ科の亜人族 がいたね。名前は確か・・・」

「コーパス。ユング・コーパスです。おそらく今日は非番だと思いますので、都合はつくかと思えますよ」

「そう！ コーパス君だ。彼はこの事件が終わったら昇進間違いないだろうね。大手柄であろう。まあ、とにかく今日の夜にでもコーパス君の家に行こうではないか。あいにく私たちは引越しの最中で宿がないものでね」

シム力は自慢の無精髭を撫で回しながら大きく笑ってみせた。

W3団の保障4

その夜、僕らはコーパスの自宅にて、シムカがいう未知なる大事件を解き明かすべくための小さな会議を開いた。

「初めまして、あなたがかの有名なシムズ・シムカートンさんです。私たちが警察の間でも有名で大変聡明な方だと存じております。ああ、申し遅れました。私、ユング・コーパスと申します。三丁目のリーリック通りに配属されております。エルムとは故郷が近く、私がここにくる前からの親友であります。それで、彼から聞かされたのですがなにやら物騒な事がおこっているそうです」

コーパスは両手にマグカップをもち、それを僕たちに渡すと少し不安げな表情でゆっくりと椅子に座った。

「やあ、こちらこそ。有能なるコーパス巡查。あなたの日頃の活躍は今の警察の中では悲しいかな、非常に際立っている事でしょう。あなたの上司にその真面目さや謙虚さ勇姿を見せたいくらいです」

シムカはコーパスの性格を見抜いたのか、えらく低姿勢で受け答えをしたようである。

「身に余るお言葉ですが、確かに恥ずかしながら今の警察の信用は酷く低迷しております。この原因は明白であり幾度となる怠慢におけるものであります。不当な賄賂に無能とも終えるほどの墮落しきった上官たちによる責任の丸投げ。事件はたらい回しになり一向に進行しない。街の治安は過去最低を示しております。こうなつては民間人の信用は皆無となり、最近現れたよく知れぬ団体なんぞが名をあげて当然であります。私はもう一度、街の治安と警察の信用を回復したいと思っております。あんな顔もわからないような連中にこの街を任せておけません。シムカートンさん、どうか貴方の卓越なる頭脳で良策となるものを練ってもらえないでしょうか？ お願いたします」

コーパスは深々と頭を下げ、シムカもその確固たる姿勢に感銘を

うけたのかいつになく真剣な眼差しでコーパスの丸い背中をじっと見つめていた。

「どうか頭を上げなさいなコーパス君。私は君の姿勢にいたくも感銘をうけたつもりだ。大丈夫、君のいう良策は既に練り上げている。今日はそれを伝えにきたのだ。この策には君という人物が必要不可欠なのだからね。よし、それでは事の真相を説明しよう。しかしあくまでも私の考察にすぎなく真実にせまる一つの可能性であることを先に述べておく。それでは話そうか。W3団の実態をね。いいかい、一気に説明するからそのつもりで。コーヒーを飲み終わておく事を強くすすめるよ」

シム力はそういうと、椅子の上であぐらをかき、両手を頭の後ろに置いて、天井をみながら話はじめた。

「結論からいおう。W3団とは善意な保険団体でもなんでもない、あれは大規模な犯罪組織だよ。それもとびきりのね。彼らの狙いはこの街の治安と警察の信用を低迷させ、国の資金源を根こそぎ搾り取り、国家としての力を皆無にすることだ。

方法は簡単さ。なあ、エルム君。今日君に魚を買い出しにいかせたことを憶えているかい？」

「ええ、憶えていますとも。忘れるものですか。貴方が盗人に扮し、僕は団員のふりをして魚を頂戴した話ですね」

警察官のコーパスの目がキラリと光るが、事件の真相に迫るには必要だったとシム力がいい、なんとも納得したようだ。

「そのとおり。今回の事件もそれと全くの同一である。解りやすく説明しようか。さて、エルム君。さきほどの君が商いで団体の保険に加入したら、という話を憶えているかい？」

「だから憶えていますとも。あまり馬鹿にしないでください。確か私が団体の保険に加入したら、数年でまるまる財産が無くなってしまうとってましたね」

「アハハ、まあむきになるでない。よく考えれば誰にでもわかることなのだよ。いいかい？ 例えばエルム君の財産が50000ベ-

ルあつたとする。君は年間300ベールを払い団体の保険に加入した。そしてその年にそっくり財産を強奪されてしまった。だけど君は団体の保障により財産の7割である3500ベールが返金された。そして君は1500ベールを失ってしまったが地道に働き翌年にはまた財産が5000ベールになった。しかしなんということだ。街の治安が悪い事にまたもや全財産を奪われてしまった。しかし案ずる事なかれ。君は団体の保障が適用され、また3500ベールが返金される。そして損失は前年の分を含め3000ベールとなり。君はがむしゃらに働き翌年には5000ベールに増やした。しかし街の治安は悪くなる一方で警察は全く役に立たず、町中は犯罪者で溢れてゆき、今年も当たり前のように5000ベールを奪われた。損失は4500ベールに膨らみ、最初の年に所有していた君の財産の9割にあたる。しかし君は手元に3500ベールあるので気づかずまた5000ベールをためる。もうお分かりだろう。この毎年一定の財産を強奪している盗人はW3団の団員その者なのだよ。おそろく保障している団体が財産を銀貨ではなく、宝石か金に変えるように差し向けているのだろう」

「しかしシムカートンさん。団員が盗人であるなら団体よりさきに我々警察が先に捕まえることもあるはずです。尋問を受ければ彼らは団体のことを話すでしょう。しかし、これまで捕まえて来た盗人どもはそんなことは一切語らず終いです。意思の弱い彼らに、このような大それた事件を黙秘できるなどは到底思えません」

コーパスは身を乗り出し警察の面子をかけて反論するが、シムカはそれをゆっくりと流し、僕はコーパスの肩に手を乗せ再び席に着かせた。

「確かに、彼らにそのような意思はないであろう。さて、エルム君。W3団の3つ目の保障を憶えているかい？」

「ええ。ちよつと待つてください。確か新聞に・・・」

僕はコートのポケットから小さく折り畳んだ新聞紙をとりだした。

「これだ。『3、捕獲した犯人は厳罰に処置をするため、警察に

ではなく直接我が団体によって適切な処置をし、今後二度と悪事に手をだせないよう公正させ社会に復帰させていることを約束します。』ですね」

「ありがとう。さて、この保障で注目すべき点は『警察にはなく直接我が団体によって適切な処置をし』という部分だ。彼らは団員ではない盗人を警察に渡さず、こんな甘い条件を出すのであろう。『我々の団体に入り、団員として働くのであれば警察には送らず、一定の給料と安全を保障しよう』とね。

盗みを働く連中は大抵飢えにこまって悪事を働いてしまうものだ。そんなこといわれたら誰でもそれに従うであろう。つまり、あの頼りない団員達の正体はこの街の犯罪者だつてわけさ。なんとも滑稽だろう？ 元盗人が盗人を追いかける。こんなに奇妙な話は聞いた事がない。よつてこの団体自体が犯罪組織だつてわけさ」

「しかし謎ですね。そんな膨大な資金をなんのために使うのでしょうか？ なにか買うつもりなのかな」

「さすがエルム君！ 察しが良いな。そう、この莫大な資金はあるものを大量に仕入れるためのものだ。その手がかりは昼間の市場で見かけた団員の腕を見て解つたよ」

「仕込み拳銃のことですか？」

「ご名答。僕の知る限り、一端の団体が団員一人一人に仕込み拳銃を用意しているなんて聞いた事が無い。よほどの武装品の余裕がないと無理なことだ。それに気になる事件が一昔前にあつてね。ポードーランドという国が反政府団体に武力行使された話だ。そのポードーランドは小さい国だったが地下資源により財力はあつたのだが、ものの数年で低迷し荒れ果て、反政府団体が現れたころには既に国家としては壊滅状態だったのだ。新聞の写真には反政府団体の横には三角帽の連中もいた。おそらく今でいうW3団であろう。彼らは反政府団体に雇われた連中なのさ。狙つた国を衰退させ、簡単に没落させる直接は手を下さず相手を蝕む寄生虫のようなやつらだ」

シムカは右手に握り拳をつくり、それを思い切り頭上に振り上げ、ゆっくりと一差し指をピンと直立させた。

「幸いW3団がこの都市にきてまだ間もない。大規模な犯罪がおこる前に事態を完全に鎮火させなくてはならない。そのためにはW3団の頭脳であるこの取締役であるウエスト・ラー・ホークマンを捕まえる必要がある。なあと、やつを捕まえてしまえば事実上W3団は壊滅する。盗人団員のほとんどに知恵はなかるうて。

さて、本来なら今すぐにも行動したいのだが、いささか準備が必要なのでね。事は明日の夜中にでも決行するつもりでいたまえ。集合場所はルイジアナ広場の『ブルータス』にしよう。ああエルム君、団員のバッチを忘れないように。では諸君、明日のW3団壊滅を祝して乾杯しようではないか！」

W3団の保障5

次の夜、僕は待ち合わせ場所の『ブルータス』につくと既にシムカとコーパスが店の前に立っていた。

「やあやあエルム君。待っていたよ。バッチは持ってきてくれたかい？」

「ええ、持ってきましたよ。はて、そういえばこのバッチ、どうやって手に入れたのでしょうか？」

シムカはバッチを受け取ると、自分の胸に指をあてた。街頭の光で輝くなにやら星型のバッチが見えた。

「なんと！ それは私の警察バッチではありませんか。いつの間にな！」

コーパスは開いた口が塞がらないようで、そんな彼にシムカはなんと満足そうな笑みを浮かべ、バッチを親指で弾じき、見事にコーパスの胸ポケットに着地させた。

「さて、揃いも揃ったことだし早速事を始めるとしようか。こちらの準備はすぐできるので安心したまえ。君たちは私のいうとおり動くだけでいいからね。あとは私がどうにかするからさ。じゃあ、それではまずコーパス君。君はその警察バッチを胸につけて、思い切り警察であることを主張する素振りで行たまえ。そしてエルム君。君はこの団員バッチを出来るだけ目立つ位置につけたまえ。よし、それでいい。準備はこれで完了だ。それでは早速ルイジアナ広場に向かおう」

僕は右胸の目に留まる位置にバッチをつけ、はやばやとルイジアナ広場に向かった。ルイジアナ広場は夜中ということもあり昼の賑わいは嘘のようにしんとしており、市場にならんだ商店もみな閉まりきっている。しかしその商店の前に、ぼんやりと白い三角帽が見えた。W3団である。

「それではまずエルム君。あそこの装飾屋にあらかじめ仕込んで

おいた宝石箱ある。中身は当然空っぽだよ。そして君は団員の目の前でその宝石箱を奪って『ブルータス』の前まで逃走してほしい」

「ええ！ とても危険じゃないですか。もし捕まったらどうすればいいのですか」

「大丈夫。手はうつてある。そしてコーパス君。君は宝石箱を持って逃げたエルム君を追ってほしい。しかも君たちは追いかけてくる団員と一定の距離を保ちながら『ブルータス』の前を通ってくれたまえ。私からは以上だ」

「シムズ・シムカートンさん。あなたはどうなさるのでしょう？」

「私のことは心配しなくていい。とにかくあの団員があそこにいるうちに事を起こしたい。さあ、行った！ 行った！」

僕は急かされるように背中を押され、市場の中に入ってしまった。装飾屋の裏側から少し団員を覗いてみると、なんとも眠そうにぐらぐらしながら何回もあくびを続けている。

たしかに監守の能力は低いようだ。

コーパスはその場に残り、僕は店の正面に向かい横目で床下に置いてある宝石箱を見つけ、団員の目の前を通った。

「おい、お前。私服でバッチをつけるなといったであろう！ おい。聞いているのか」

団員がこちらのバッチに気づいたので僕は一気に宝石箱を掴みそれを抱えて走り出した。

それと同時に勢いよく店の裏からコーパスが現れ、声を裏返しなから思い切り叫んだ。

「みたぞ！ 盗人！ このユング・コーパス巡査から逃げきれるとおもうなよ！ でやあ！」

一気に僕らの逃走劇が開始する。そしてやっとのことで事の重大さに気づいた団員が僕らを追いはじめた。

僕は全速力で走るとどんどん団員との差が開いてゆく。なんだか団員はぎこちなく走り非常に遅い。これはまずい、シム力がいうように一定の距離をとらなければいけない。僕とコーパスは一度横

に並びながら走り、少し減速しようといいい団員と一定の距離を保ちながら『ブルータス』のある通りまで来た。

そしてシム力にいわれたとおり『ブルータス』の前を通った次の瞬間、足下になにか引っかけかきを感じ僕は宙返りするように転倒した。駆け寄つて来たコープスは何かに気づき、それを跨いで僕を抱き起こすと、ぐあんという鈍い音とともに彼はドサリと倒れ、僕の視界も徐々に薄れてゆき完全に意識を失ってしまった。

次に僕が目覚めると僕は椅子に座らされていた。体中に縄で縛られており、横にいる見慣れた男も同様であった。

次第に意識がはつきりしてきたので当たりを見回すと、そこは窓のない石造りの部屋であった。僕の故郷では冬の寒さを凌ぐため、地下を掘ってそこを住処にしていたが、まさにその作りとそっくりであり同時にここが地上ではなく地下だということがわかった。

部屋の中には団員が左と右の角に二人いる。右角の団員は落ち着きのなく、ときおり屈伸などをしながらぐらぐらと立っており、それとは逆に左角の団員はじつと姿勢よく直立を保っている。

いざとなったら逃げ出すのは簡単だが、この縄と未だ気を失ったままの彼もどうにかしないといけない。さて、どうするものか。シム力はいったいなにを考えているのだろう。これも彼の計画の内なのであるうか。

不安を募らせていると、後ろのドアが勢いよく開き、大柄な白いマスクを被った人物が入って来た。

「このもの達を捕まえた団員はだれだね」

低くしつかりとした落ち着いたものいいであり、僕は彼がこの団体の取締役であるウエスト・ラー・ホークマンであるとすぐに気づいた。

「あつしで、ありやす。ホークマン団長。うへへ」

答えたのは部屋の右角にいる男で、腰を曲げ背中を丸めながら下品に笑い手をあげた。

「よくやった。褒めて使わず、これを受け取れとれ」

ホークマンはポケットから金貨一枚をだし、それを団員に投げた瞬間、いきなり左角にいた団員が甲高い声で金貨に向かって跳び込んで来た。

「よ、よこすのだ！ やはりその金貨は、わた、お、俺のもんだあ」

「うるせえ！ おめえが、さつきわしに手柄をくれたんだろうが」
二人の団員はもみくちやになり、とっくみあいを始めた。

そしてそれをじっくりと見ていたホークマンが思い切り怒鳴り散らした。

「ええい、やかましい！ 貴様らは部屋を出とれ！」

ホークマンはビクビク震えている団員の尻を蹴飛ばし部屋の外へ追い出した。

部屋の扉はガチャリと鍵がかかる音がし、部屋の中はいまだ気絶中の彼と僕とホークマンだけとなった。

W3団の保障 完結

「まったく・・・さて、貴様らをどうしたものか」

ホークマンは部屋の中を歩き回りながら話し始めた。

「貴様、そのバッチどこで手に入れた。わしの団体にはネコはいないからのう」

「これは広場で落ちていたのを拾ったのだ」

「なるほど、ではお前の横にいる警察官は何者だ」

「リーリック通りに所属しているユング・コーパス巡査だ。僕の友人である」

「なるほど、なるほど。さて、お前らの一連の行動。何を企んでいる？」

「それは・・・」

ホークマンがぐいっと顔を近づけたその時だ。シュツという擦れた音がした。

ぴたりとホークマンの動きが止まり、額に付けられた小銃から汗が垂れる。

デリンジャーだ。やっと目覚めたこの男が甲高い声をあげた。

「それは、我が街の治安と安全を守るべく、貴様のような卑劣な悪人を成敗するためさ。byユング・コーパス。どうだいエルム君、いかにも彼がいいような言葉を選んでみたよ」

シムズ・シムカー-tonは仕込み銃をホークスマンの額につけながら、彼のマスクを掴み、思い切りそれをとった。

僕はホークスマンの顔を見て驚いた。彼もまた僕と同じネコ科の亜人族であった。

「驚いたであろう。私も亜人族である事は推理できたのだが。確信したのはこの建物を見てからだ。体全体を隠していること、保障制度が『盗難』に限られていること、そしてこのアジトがネコ科の亜人族特有の作りをしていることで、私は彼をネコ科の亜人族だと

断定したのだよ」

それを聞くなりホークマンは耳を垂らしその場に膝を落とした。

「おいおい、まだ話は終わってないのだよ。貴様が商人達から奪った財産はどこへやったのだね」

ホークスマンは頭の後ろに銃口を向けられたまま部屋の戸棚をずらし、壁に埋もれた隠し金庫から宝石箱を取り出した。

「団体ができて間もないので、これしか稼げてない。頼む、見逃してくれ！」

シム力は宝石箱を受け取るとニヤリと不適な笑みを浮かべ、中の宝石を当たり前のように懐にいれた。

「あ、あんた警察だろ！ あっ」

どすん、と音をたて、ホークスマンは深い眠りについた。おそろく起きた頃には牢屋の中であろう。

「さて、エルム君。目当ての品も手に入れたことだし、僕らもそろそろ去るとしよう」

シム力は僕の縄を解くと、にんまりと笑い手を差し伸べた。

「ぬ、あいたたた」

「これは、さつき気絶させられた分です」

「いやあ、エルム君。待つのだ。はは」

「これは大切な友を失った分です」

「あだだだ、まあ、いいじゃないか。どちらにせよ私たちはこの街を去るつもりだったんだし。第一ネコとイヌは相容れぬものだよ。それより、そのコーパス君が警察連中を引き連れてここを包囲しはじめている場合いだ」

シム力は顔にできた引つ掻き傷を慎重に触りながら、血が出ていないか確認している。もちろん思い切り爪で引つ掻いたので血は出ている。

「コーパスは無事なんでしょうね」

「もちろん。さつきまで一緒にこの部屋にいたではないか。もっとも彼は緊張すると自慢の低い声も甲高い鶴のような声になるみた

いだけど」

「ああ、あの金貨に跳びかかった団員か。コーパスもよくやるなあ」

「では！ エルム君。行こうではないか。このシムズ・シムカートンという名探偵とエルム・スピリットという最高の弟子がいた思いで出をこの街に残して、我らは次の財宝目指して旅に行かん！」
こうして、僕らはこの街を後にした。

今朝の朝刊の見出しはこうだ。

『勇姿！コーパス・ユング巡查、W3団体の悪事を暴く！！』

記事の写真には白いローブを着たコーパスが、意識朦朧のホークマソンの上に乗リガッツポーズをしている姿が写し出されている。

「しかし、あるとき、なぜ僕たちを気絶させたのですか？ それにあの店の前で引つ掛けたものは一体……」

シムカは馬車の窓を見ながら笑っている。

「あときは申し訳なかった。とにかく敵のアジトを見つける必要があったのだ。そこであらかじめ店の前にピアノ線を張っておいて君らが転んで気絶するように差し向けた訳だ。しかしながら君は頑丈でコーパス君は用心深く転ばなかったから、ちよいとこの凶器を使わせてもらったのだよ」

そういつてシムカは懐から握りこぶし大の黒いパンをとり出した。そのあと倒れている君たち二人を団員が発見し、さすがに一人で運ぶのは無理だから仲間を呼ぼうとしたが、目を離している隙に逃げってしまう可能性があった。そこへ私が現れて代わりに広場の団員を呼んで来てくれと頼まれたのさ。そして広場の団員の一人を眠らせて団員の服を拝借し、君たちが眠っている場に戻り、アジトに運んだわけだ」

「すると貴方はいつコーパスと服装を入れ替えたのですか？」

「アジトに着いてからだよ、入り口で君の手柄なのだからさきに

団長に伝えて来たまえといい、彼が戻ってくる前にコーパス君を起こし事情を説明したわけだ。そとは暗かったから団員も私とコーパス君の顔も大して気にはしなかったのである。そしてコーパス君は部屋で一悶着する演技を上手にこなし、部屋をでて広場に戻るといい、警察の応援を呼びにいったというわけさ」

シム力は手元の黒いパンをなんとか噛みちぎろうと奮闘しながらいった。

「ああ、君はホークマンは私がコーパス君だと勘違いしたままだから、金庫の宝石の行方がコーパス君に疑いがかかると心配しているのだろうか？ 大丈夫。いつものように手紙を一枚置いてきた」

「コーパス巡査！ ホークマンの金庫にこんなものが・・・」
「なに、みせてみる。・・・なんと！」

『親愛なるユング・コーパス巡査。これにて事件は一件落着です。あなたの次に取るべき行動は、そこに眠っている大きな猫を成敗することであり、この悪に染まった宝石など貴方の手をかける間でもありません。』

「ご心配なく、この美しいルビーやエメラルドは、私が代わりに処分させていただきますよ。」

この街の警察とW3団体に感謝して。 名探偵シムズ・シムカートンこと、怪盗シムカより『

馬車の音に揺られながら、目を瞑り気持ち良さそうなシムカに尋ねてみる。

「シムズ・シムカートンの一番得意とする変装はいかに？」

シムカはゆっくりと片目を少しだけ開けて、いつものようにニヤリと笑い、右手の人差し指を口にあて、さも満足そうにこういった。

「名探偵さ」

W3団の保障 完結（後書き）

最後まで読んでいただき、有難うございました。
よろしければ感想やコメントなどいただけたら幸いです。
また、機会があればよろしくお願い致します。

東の探偵と西の怪盗

シムズ・シムカートンは驚くほどにギャンブルに弱かった。その上、無類のギャンブル好きという始末である。

あれほど沢山あつた金品は全て賭け事に湯水の如く使いきつてしまった。しかも本人は全く懲りる事もなく、いつも「あらゆる選択の先には損や得という結果があるかもしれない。しかし例え結果が得になったとしてもその一歩先を進んで振り返れば、すべてが後悔に映る。大事なことは過去を振り返らない事と、立ち止まらない事だ。立ち止まると人は自ずと振り返りたくなるからな」そんなことを笑いながらいうからたまつたものじゃない。

金貸しに追われる僕の身にもなつてほしい。

とにかくだ。ようするに僕たちは今、全速力で逃げているというわけだ。

「オラー！ てめえ、待てねえかあー！」

金貸しのミシマー家のチンピラどもが怒声を上げた。僕たちは広場を逃げ込み、広場のテントの中に潜り込んだ。

「エルム君、どうだい。ここで一つ賭けをしよう。このコインの表がでたら私が囿になってテントから出る。裏が出たら君が囿になつてテントから出る。どうだい。おもしろいだろ？」

「この期におよんで！ ……わかりました。いいでしょう。さ、はやく」

チンと音を立て、テントの低い天井にコインが擦り、シムカの左手の甲に着地し、素早く右手でそれを押さえた。

そして一拍の間が生まれ、お互い目を合わせ頷いては右手を思い切り離れた。

ようやく広場が静かになった。遠くでミシマー一家の音がする。どうやらシムカが上手く役目を果たしているらしい。

僕は市場で深い羽根つきのハット帽と琥珀色の色眼鏡を買い、馬車の荷台に敷いてある麻の布切れを羽織り、道端に落ちていた魚の骨を銜えながら、広場から少し先にある酒場に向かった。酒場の名前は「ヤゴロウ」である。

らっしやい、と小柄で白髪店主が出迎えてくれた。僕はとりあえず席につき、静かにあぐらをかいた。

メニューを見ると見慣れない文字がとびこんできた。

「すみません。これはなんと読むのですか」

店主は仕込み作業を止め、布で手を拭きながらこちらに近づき、僕の爪で指したメニュー欄を細い目を見た。

「マグロのサシミ、ですかね。ようは生魚の赤みの切り落としてすわ」

「ああ、じゃあそれお願いします。それと、ここのをやつを」

「サ・・・バのミノニですね。豆のタレを使った煮込み魚ですわ」

先ほどのシム力が投げた銀貨で思わぬ飯にありつけそうで、自然に顔がニヤけてしまう。

僕は垂れるヨダレを拭いながら、色眼鏡のレンズを磨いていた。

ずっと暗色とした視野だったもので周りの景色が新鮮に感じ、改めて店の周りを見たときだ。ガシャンと、勢い良く店のドアが開いた。

「くそおやじー！ このへんで羽根つき帽を被って琥珀色の色眼鏡をした猫野郎をみなかつたか！」

ミシマ一家の連中である。これは不味い。まるきり僕の格好ではないか。

店主は包丁で魚を捌きながらその手を置き、包丁の刃を僕に向け

た。

「ん！ こんなところにいやがったとわなあ！」

いかにも下品で汚く体毛の濃いチンピラが目をギラつかせながら近づいて来た。

くそ、しかたがない。僕は腰に差した二本のナイフを握ったその

瞬間。

「エルム君。実に美味しそうな魚だね。私にも味見をさせてくれないかな。それとこの国ではナイフでなく箸という二本の細い棒を使って食べるようだよ」

チンピラは当たり前のように僕の向かいにドスンと座り、懐から小汚いティーカップを出した。

「さらにこの国では紅茶ではなく、この緑色の緑茶というものを飲むらしい」

落ちて着いて顔をみればすぐに解ったはず。僕は力が抜けたようにくたりと座る。

この後、テーブルの上の乗った煮魚から上がる白い湯気の先に、シムカの満足そうにニヤける顔が浮かんでいるのはいうまでもないことである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2844o/>

シムズ・シムカートンの考察

2010年10月20日12時33分発行